

平成26年度第3回 白井市総合計画審議会
<議事概要>

日 時：平成26年11月5日（水） 午後2時～4時26分

場 所：白井市役所 3階会議室2

出席者：【委員】

市川温子委員、平川正之委員、山岸秀之委員、小林信章委員、山崎康夫委員
高尾公矢委員、辻川 毅委員、遠藤 薫委員、竹内正一委員、松本千代子委員
山口善弘委員、亀川 香委員 12名
[欠席者]…助友裕子委員、関谷 昇委員、林 榮造委員 3名

【事務局】

折山企画政策課長、相馬主査補、富田主査補、黒澤主査補（都市計画課）

【計画策定支援事業者】

㈱地域計画建築研究所 木藤研究員

傍聴者：0名

1. 開 会

[事務局]

- ・平成26年度第3回総合計画審議会を開催いたします。

2. 会長あいさつ

[会長]

- ・お忙しいところご出席をいただきまして、ありがとうございます。
- ・当審議会の第1回、第2回の審議会では、白井市の置かれている状況というのが明らかになってきたと思います。前回までの説明を踏まえた大変率直な審議をしたいというふうに思います。
- ・本日は、市からの素案の案が議題にあり、この案について審議をいただき、審議会としての意見をまとめていきたいと思います。素案についての審議ですので、行政に説明を求めるといよりは、審議会の中で議論をしていきたいと思います。今後まちづくりも新しい段階に入ったという意見もありますように、市民が主体のまちづくりをしていかなければいけないということだと思いますので、そういう意味でも審議会の活発な意見をお願いしたいということでございます。簡単ではございますが、会長としての挨拶とさせていただきます。

3. 議 題

◎審議会議事進行

白井市附属機関条例第6条第1項により高尾会長が議長を務め議事進行。

(1) 第5次総合計画 基本構想素案（案）について

[事務局]

- ・下記の配布資料により説明
議題1－1資料「白井市第5次総合計画 基本構想（素案）（案）」
議題1－2資料「第5次総合計画の体系イメージ」
議題1－3資料「市民等の意見の分類」

[議題（１）の説明概要] 第５次総合計画 基本構想素案（案）について

- ・基本構想はその第５次総合計画策定方針で基本理念、将来像、大綱、将来人口、土地利用で構成するとしている。

1 基本理念について（資料１ページ）

- ・市のまちづくりの理念として、いつの時代においても変わらず、そこに暮らす全ての市民が感じる幸せを最大化することとし、その「幸せ」をつくるために、これまで第４次総合計画で基本理念の要素として「安心」「健康」「快適」としてきたことも引継ぎ、よりいっそう「安心」「健康」「快適」を実感できるまちづくりが重要と考え、この３つをまちづくりの理念とした。
- ・「安心」は人が感じる安心にはさまざまなものがありますが、その安心の要素を多くして、市民が地域で何の不安もない生活を送れるようにすることが重要であるとし、市役所を中心としたエリアの新たな機能との連携や市民、地域との連携でさまざまな安心をつくりだしていくまちづくりを目指すこととした。
- ・「健康」についても「安心」と同様まちづくりの根本とし、市民自身の「心と体」の健康を創っていくことにより、その地域、まち全体が健康であるまちづくりを目指すこととした。
- ・「快適」は「安心」と「健康」があつてその上で、生活に「うるおい」や「憩い」、「気持ちよさ」というエッセンスが加えられるまちです。快適にもいろいろな要素がありますが、白井市の特性である「都市と自然の調和」の中で、憩いのある暮らし、便利さ、心地よさを追求する、いわば「生活の質」を高めるまちづくりを目指すこととした。

2 将来像について（資料２ページ）

- ・これまでの市民参加の住民意識調査やタウンミーティング等でのワークショップの意見、児童・生徒の意見から総合的に、「活気のあるまち」「人のつながりのあるまち」「人を呼ぶまち」「みどりの活用」が多くあった。これらの要素を含んだまちが、市民が望んでいる１０年度のまちの姿と捉え、将来像を「ときめきとみどりがあふれる快活都市」と設定した。
- ・「快活都市」の「快」は様々な生活の場面で市民が気持ちよさや憩いを感じる、快適な時間をすごしている状態、「活」は個々の人のつながりによる活力から、地域、市全体の活力が生まれる状態をあらわし、「生活の気持ちよさ」と「活気のあるまち」を併せ持った、「快活都市」を目指すべき姿としている。
- ・住む人、「市民」と市の資源である「みどり」は市の財産であること、市民も人のつながりとみどりの保全・活用を希望していることから、「人」と「みどり」を活かしたまちづくりを進めることが重要ということを念頭に置き、みどりを守り、そして、活用していくことが、生活の快適さを高めて、暮らしの中で「ときめき」につながるという考え。
- ・「人のつながり」による「ときめき」と「みどり」による快適からくる「ときめき」が融合し、「あふれる」ことによって、相乗効果を生み、まちの「快適」と「活力」を生み出すという考えで「ときめきとみどりあふれる」状態を表している。

3 まちづくりの基本的視点について（資料３ページ）

- ・これまでの市の将来像に関する市民意見を行政分野横断的に集約し、１０年間の将来像を実現するための基本的視点が浮かび上がり、５つ設定した。（資料１－３参照）

4 まちづくりの重点戦略（資料３ページ）

- ・今回の計画は総花的なことを羅列するのではなく、この１０年でどこに重点をいれた政策をうっていかを明示していくとしていたとおり、まちづくりの重点戦略を３つ定めた。
- ・「戦略１ 若者定住プロジェクト」は地域、まちの活力をより増大させるための「根底」として、人に選ばれ、白井市に定住していただくことが必要であるため、単身の若者世代やファミリー層を中心とした若年層の定住を促進し、子育てを楽しめる空間、これらの世代が快適と思える生活空間をつくり定住を促進することとした。

- ・「戦略2 みどり活用プロジェクト」は生活の場面で憩い快適さを感じるため、みどりを活かした憩いの場づくり、農の営みを活かした風景づくりや地産地消の仕組みづくりなど生活に潤いをつくるものとした。
 - ・「戦略3 拠点創造プロジェクト」は地域やまちの活力を生むため、人があつまり、交流できる空間や場をつくることや、そこへ移動しやすい環境をつくり、人と人が知り合い、つながりを生み、それが、地域やまちの賑わい、活力につながる拠点のあるまちをつくるプロジェクトとした。
 - ・以上、重点戦略としたが、これ以外のまちづくりについても、もちろん行政はカバーしなければならない。今回の重点プロジェクトにないものや行政として、最低限行うことなどは、「実施計画」で受け止めて事業化していく。
- また、一見、重点戦略の中に、市民が重要視している防災・防犯や高齢者の施策、健康に関することがないようにみえるが、今後、重点戦略を実現するための取り組みを分野横断的に施策だてしていくと、例えば、「みどり活用プロジェクト」には、高齢者の生きがいの事業がでてきたり、「拠点のプロジェクト」では、防災・防犯の拠点の視点がでてきたり、あるいは、健康の拠点ができることも考えられる。これらは、基本計画の施策の中でこういった視点が出てくることになる。(資料1-2参照)

5 まちづくりの進め方 (資料5ページ)

- ・将来像の実現に向けた、計画を推進するための共通の方策になります。
- ・「(1) 情報・共有」は市と行政が双方向の情報の流れをつくり共有することと、市民意見が多かった、まちの魅力の発信を進めることとしている。
- ・「(2) 参加・協働」は平成24年に策定したプランのとおり、まちづくりの主役である市民の積極的な市政への参加と、市民と行政が対話して、それぞれの特性にあった役割分担のもとで協働して、まちづくりを進めていくこととしている。
- ・「(3) 持続可能な行財政運営」は自主財源の確保、事業の選択集中すること、行政と民間の役割分担や連携など効率的な財政運営を進め、持続可能な行財政運営を進めることとしている。

6 将来人口 (資料6~7ページ)

- ・この6ページに記載の将来人口の見通しは4で示した重点戦略を打たなくても、このままいけば平成32年の65,500をピークに人口減少に向かうことを示している。
- ・7ページには、平成32年以降人口が減少に転じること、年齢構成も生産年齢人口、年少人口が減少していくことから、一定の人口規模と年齢構成のバランスを保つため、4で示した重点戦略を打ち、若者世代の定住や流入を進め、人口ピークと推測される平成32年の65,500人を10年後も維持することとし、これを目標人口とするものである。

7 将来都市構造 (資料8ページ)

- ・将来像を実現するための、市の土地利用や道路などの構造を表すもの。
- ・土地利用は、大きく分けると、田園風景が多く残るゾーンと、市街地形成と緑が形成されているゾーンがあり、濃い緑の部分は自然と農地をしっかりと守り、活用する「緑農」ゾーンとし、黄緑は市街地と緑が調和した「緑住」ゾーンとしてまちづくりを進めるもの。
- ・ピンクの部分は、市役所や白井駅を中心とするゾーンはコンパクトでにぎわいのある拠点づくりとして「中心都市拠点」としてまちづくりをすすめ、西白井駅は地域の住民の暮らしを支える「生活拠点」としている。
- ・その他、これらの拠点や各地域を結び付ける道路、国道16号と464が大きな矢印で広域幹線軸、その他の区域の道路を地域軸と設定している。

- ・以上、基本構想素案の案の概要となるが、本日欠席の3名の委員から、配布の資料のとおり、意見をいただいております、こちらもあわせてご審議いただきたい。

【質問・意見等】

[委員]

3つの「安心」「健康」「快適」は良いと思います。

[委員]

- ・基本理念は総合計画ですのでこのような感じだと思います。ただし、まちづくりの3つの理念を達成するためにはどういう重点課題をやるべきかをここに出すべきと考えます。
- ・この5つのまちづくりの基本的視点は、重要事項を実現するためのキーポイントだと思います。このキーポイントは重点課題から見えてくるはずだと思いますので、そのキーポイントに対してどういうことをやっていったらいいのかということを書けばいいのではと考えます。
- ・まちづくりの重点戦略の「若者定住プロジェクト」で「若者」というと私たちの年齢層は二十歳ぐらいをイメージしますので、私は「若い世代」という表現で良いのではないかと思います。「若い世代」がこの白井市に定住していただければいいのではないかと思います。それと住民意識調査では移住したい理由が3つあり、「交通費が高い」「通勤・通学に不便」「市の発展に期待できない」これに対する戦略をしないと多分、白井市から出ていってしまうと思います。ここは本当に戦略を練って定着するための何かプロジェクト的なものを展開したほうがいいのではないかと思います。そういうことを全部組み合わせた結果で、白井市の将来像が出てくるのではないかと思いますというのが私の意見です。
- ・将来都市構造の中で「コンパクト」というのが出ているのですが、白井市にとってそのコンパクトというのはどういうことを意味されているのかというのが質問です。それと、私が一番大事だと思っているのが鉄道の事業で、この構造に鉄道が入っていません。また、木下街道のように、白井市にとって特色のあった街道を大事にしていくということも大切と考えますので、単なる幹線という扱いではなくて、風情のある街道みたいな特色を残していきたいということも思いました。

[事務局]

市役所や白井駅を中心に「中心都市拠点」としているのですが、これは、市役所を中心として消防署や予定されている新庁舎に警察分署が入ること、そして医療施設が至近に予定されていることから、人の流れが今後でてくることが予想されることから、白井の顔となる玄関口の白井駅前の賑わいづくりと合わせて、コンパクトな賑わいのある中心拠点ということで、このような表現となりました。鉄道については、この図のほうには鉄道の線路と駅は書かせていただいております。

[委員]

絵にはありますが、凡例の中にはないのです。

[事務局]

凡例の中にはないということですね。そこはまた検討させていただきます。

[会長]

幹線主要道路はあるけど、今言われた街道というか、何かそういう風情のあるみたいなところは、ここにはないというご指摘ということに受けとめさせていただきたいと思います。

[委員]

関谷委員から「快適」について、一人一人自分なりの価値観での幸福を求めることが、世界的潮流であり、市民それぞれが自分なりの快適を求められるまちづくりが大切という意見があります。一方で、基本理念の案には「全ての市民の幸せを最大化する」というふうに書かれています。気持ちは非常によくわかりますが、用語としては注意しなくてはいけないと思います。とにかく最大化すればいいという中で、色々な大事なことを落としてしまって、例えば10人のうち8人が幸せで2人が不幸せでも足し合わせてみれば最大化かもしれない。一人一人がそこそこに幸せな場合と誰かが犠牲になるけれどその他のみんながすごく幸せなのか、それも含めて最大化というふうにくくってしまいますと、非常に批判の多い用語になります。「全ての市民」と書かれていますのでそこまで絶対お考えにはなっていないだろうと思いますが、全ての市民の幸せをそれぞれ最大化するというのは、大変な言い方だなという気もいたします。どういう言い方がいいのか、申し上げにくいのですが、私としては関谷委員がご指摘のとおり、「一人一人が自分なりの価値観を受け入れる懐の深いまち」というくらいが落ちついていいかなという気がします。基本理念の構成としては、この3本柱でいいと思います。

[会長]

それでは、「全ての市民の幸せの最大化」について、意見をいただきたいと思います。

[委員]

言われてみればなるほどと思いますね。意気込みはすごく感じます。どうやって変えたらいいでしょうね。

[会長]

意気込みはわかります。要するに「全て」というところがやっぱり引っかかるところかなと思います。

[委員]

気持ちはすごくわかります。

[委員]

関谷委員の意見もなるほど思っており、私は障害者福祉計画の策定委員にもなっているので、「一人一人の自分なりの価値観で」という言葉は「あっ、いいな」と思い、我々も障害について理解していかなければなりませんし、皆が理解しないとイケません。易しく、わかりやすい言葉で良いと思います。活字になると、こちらのほうがわかりやすいです。

[会長]

表現の問題かなという部分ですね。

[委員]

この3つの基本理念の内容については、私はこのままでいいのではないかと思います。「全ての市民」という言葉が論議となっていますが、「全ての市民」ということを頭に置いた理念であるということで、許せるのではないかと考えたいです。それと、ちょっと外れますけども、みんなが白井に永住としてほしいということについて、豊かさということが、何か少し足りないような感じがします。豊かさというのは何かというと、財政だとか、あるいはそういうふうなことで市民が安心して生活できるための、例えば工業団地なんかでも企業の誘致をしてお金が市に落ちるといような、企業誘致という視点が少し欠けているような感じがするのです。もう一つ、豊かさあるいは住みよさという意味で環境が「みどり」ということで表現していますが、これも関谷委員の意見にもある「環境保全」という視点か

ら、具体的に私はエネルギー問題だというふうには考えており、やはりエネルギー問題を含めて環境問題だと思います。また、ごみ処理の問題も何らかの形で入れられたら良いと感じました。もう一つは、永住してもらうにはやはり一番多くの意見を持っているのは家庭の主婦だと思いますので、そういう意味で教育とか子育てをもっと安心してできるようなまちをもう少し表現できないだろうかと感じました。

[委員]

今の辻川委員のお話で心強かったのですが、例えばタウンミーティングの参加者の写真をみたときに、高齢者の方が多いのです。やはり若い世代というのはすごく働きに出ていて忙しいので、あまりそういうのに参加しなかったり、子育てで一生懸命で参加しなかったりなどありますが、本当はその世代の意見が欲しいのです。児童・生徒にはアンケートを投げかけていますが、それをアンケートだけで終わらせるのではなく、もっと、子供たちに考えてもらうような機会、例えば講習や夏休みの自由研究など何か市で開催すれば、子供たちが考えて、お母さんを誘ったりして、もっと活発になるのではないかなと思います。それで、お母さんやお父さんと一緒にタウンミーティング等に出かけたりして、そこで子供とお年寄りの交流というのを深めるということもすごく大事になってくると思います。

[委員]

ちょっと外れるかもしれませんが、印西市が全国で住みやすいまちランキングの1位になっている原因を考えたときに、白井市と比べると商業圏があったり、学校があったり大学があったり、大きな銀行があったり、どちらかという、その地に税金を落としてくれるものや働く場所があって、住みよいまちという感じがあるのではないかと思います。白井はどちらかという、市内で働く人少ないです。農業はもちろん大事で戦略にもあるのですが、ここで今まで出てきた中の意見ですと、この白井市内で働くという視点が抜け落ちているような感じがします。自分たちは日中都市へ出て行って、帰ってきて寝る。そして休みの日はこの辺で遊ぶというような生活のリズムイメージしか描いていないので、この先もそれでいいのか、それで若者が定住するのかといったら、ちょっと疑問な部分があるのです。主婦だって働きたい。働きたいけれど電車乗って行かなくてはならないとなると、子供が小さいと行けない。しかし、近くに何か働く場所があって、2～3時間でも4時間でも働ける、幼稚園に預けている間だけでも働ける場所があったら働きたいという人はいっぱいいると思うのです。なかなかそういう場所を白井市内で探そうと思うと結構大変なのです。そういう働ける場所があれば、住んでいてもお小遣いも入るし、生きがいができるし、そして知り合いも子育てしている仲間だけじゃなくて働く仲間もできるしというので、広がりが出てくるので、そういうことをもうちょっとこの中に入れ込んでもらっていたら良かったかなと思っています。

みどり活用プロジェクトで農業というのは出てきていますが、商業・工業は、ここでは全然見えてなくて、これは若者定住プロジェクトで施策の横ぐしでみていった時に入ってくるのではないかなと思っていますが、市としての意気込みの中には見えてこない部分があるので、それこそコンパクトな中心都市拠点の考えのところにも、印西市とは言わないけれども白井市にも10年の間に誘致できるようなものができたらいいなというふうに思います。

[委員]

今のお話と同感なのですが、特に将来像の中では「ときめきとみどりがあふれる快活都市」という文字を使っているということもあって、もう少し活気のある部分を打ち出すようなことを5つの視点と戦略に入れたほうが良いのではないかなというのが感想です。あと具体的な分野別の計画の中に入ってくると思うのですが、最初の基本的な視点の中にもそういう部分ももうちょっと入れたほうが快活の意味がでてくるのではと思います。

[会長]

それでは、基本理念の「安心・健康・快適」の3つのキーワードはよろしいということで良いでしょうか。その中で、今意見が出ましたような環境とか子育てとか、それからいわゆる定住に向けての就労の場の問題とか、そういうものがここに含まれれば、なおよろしいということになりますかね。ということで、この3つのキーワードは了解したということとしたいと思います。

[会長]

次は将来像についての意見をお願いします。

[委員]

将来像の「ときめき」について、何に「ときめく」のか、文章が何を説明しているのか良くわからないので、もう一度、事務局から説明をお願いします。

[事務局]

「ときめき」というのは、まず人と人が知り合ってつながることによってコミュニティができ、にぎわいや活気を生み出すということで、例えば市民が日常生活の中でも、今日はこの人と会って、こんなイベントや行事があるので楽しみとか、そういったうれしさ、楽しさ、わくわく感というものが日常にあり、生活に充実感がある状態を「ときめき」というふうに捉えています。

[委員]

今の説明は文章と違います。この文章を読みますと、「ときめき」の構成要因として「市民の一人一人・・・」と「みどり・・・」があるように読めるのです。スローガンでは「みどり」の前に「ときめき」がぼんとでてくるので、文章としておかしいと思います。もっと別の表現があるのではないのでしょうか。

[委員]

将来像のこのつくり方は今までのつくり方を踏襲しているのだらうと思います。言葉と言葉を組み合わせると何か造語をつくったり、何か直感的に訴える言葉は何が最適かとか、そういう机上で将来像をつくっていた時代だったと思うのです。しかし、社会的な状況も変わっていますし、行政ももういっぱいの中で何がやれるかというように財政的にも非常に厳しい状況です。その中で、本当に市民目線でわかるような簡単なというか、易しい打ち出し方がいいと思うのです。あまり難しく物事を考えて造語をつくって、これがこういう都市をつくるんだというような時代ではないのではないかなと思います。それとまちづくりの3つの基本理念を達成するための重大な課題は何かというのをここに持ってきたほうが良いのかなと思います。

千葉ニュータウンというのは、一つの都市としての構造で考えたまちづくりが、皆さんの目線からは結果的に印西市、白井市があるので一つではなくて、白井は白井のことだと思わずけれども、千葉ニュータウン駅を中心とするなら、まさしくあそこは中心市街地をつくろうとしましたから、白井市に同じものを持ってくるかといったら、そういうふうにはならないと思うのです。そういう中で、白井市が発展をするには、まちづくりの中で何を打ち出したら白井市らしくなるのかということをお私に考えるべきだなと思います。

それなら非常に人に優しいというか、人と人がふれあったり、人と人がゆったり暮らせるようなことが白井市のまちづくりの中には求められているのではないかと私の感想です。それは具体的に何だとはいうのはないのですが、印西市とは違うものを求めるべきではないかと考えます。

[委員]

山岸委員が言っているのはすごく正しいと思います。印西市だとか白井市だとかあるいはその周りの市とか町と対比するのではなく、この地域の中でどこが何をというところを、もう少し考えていかないといけないと思います。印西市にあれば商業施設が多くあるので、白井市に商業施設を誘致しても無理だと思うのです。印西市にはない白井の財産、宝物は何ですかというふうに、まず考えることが必要だと思います。では、緑とか農地とか言うけれども、農地は今のままでやったらギリ貧です。この10年の間に農業自体が77~78%に落ちています。梨農家も同じです。これをどういうふうに考えて修正したら良いか。個人農家にはもう任せられないという、危機感が私にはあります。今までの一次生産としての農業として考えるのではなく、生産から加工して販売するまでの一貫性を考えないと無理だと思います。その一貫して考える中に、農業の仕事がふえてくるという感じを持っています。

そういう意味で今、山岸委員が言われた、ここで何を捉えるかというところは、本当に大事だと思います。将来像としてどういう感じていくか。方向性としては「快活」というようなところではないと思うのです。やはり若い人が住んで、なおかつ仕事をしないとダメです。仕事をして、それが現実に収入になったり、地域で活躍できる場ができると思うのです。それが今ある農業と工業とその他都市等をどうやって結んでつくり上げたいのかということだと思います。

それに高齢者の介護とか子供たちの教育だとか、全部ひっくるめて考えていったほうが良いのではないかと。子供と高齢者をどうやってドッキングするか。それは健康の問題でも同じことだと思います。

[委員]

将来像の前置きの文に「千葉ニュータウン事業が収束し」とありますが、白井市というのは開発早かったと思いますので、もう収束はしていたのではないかと思います。ですから白井市というのは千葉ニュータウンを使いこなす段階に既に入っていると思います。収束というネガティブなイメージではなく、もう既にそういう段階に入っていて、みんなでうまく使いこなすステージになっている。使いこなせているかどうかはともかく、そういうステージにもう入っている。文章の最後は「次世代に継承していくことが重要です」というように結んでいるので、これで良いと思います。もう少しプラスイメージの方が良いと考えます。

それから、将来像ということで一番強みをまず考えていくことが必要と考えます。中間都市メカニズム足らないで強みを生かすというのは絶対必要だと思います。そうすると、成田空港が近くあるということで、国際性ということがこのまちの資源ではないかだと思います。国際性という言葉が一言入ると良いのではと思います。

それと入れるべき言葉として、女性の社会進出が最も進んでいるというような将来像を描くなど、そういう言葉がちりばめられていれば、いろいろな多様性、産業、若者が働く場所など好循環が生まれていくような気がします。

[委員]

今、遠藤委員が言われた女性が働くとしても、いろいろな働き方があるだろうと思う。介護の問題とか、いろいろなことへ進出できるというところもあるし、あんまりこうだという狭い範囲で考えないで、広がるような、あまり限定的にならない言葉のもっていき方をしたらいいと思います。

[会長]

関谷委員が意見として「ときめき」というところがちょっと引っかかる部分とあります。要するにみどりあふれる快活都市というのは、これはある意味でいうと白井市の特徴でもあるわけです。また、白井市の場合にはベッドタウンとして発展した、あるいはさせたまちというふうに言えるかもしれないので、そこでいわゆる仕事というのは非常に定住のためには重要ですが、それを一気にここへ位置づけるというのは難しいのではと思います。むしろそういう「みどりあ

ふれる快活都市」を前面に出していくというのが、白井市の特徴なのかもしれないです。そこに国際性というのをどういうふうに求めていくか、そういう文言を入れておく必要があるかということだと思います。

[委員]

市川市が成田空港と都心との間の位置を活かして工業団地とかあるいは倉庫街だとか非常に日本の大きい倉庫を持っています。そういうことはもう早くやることだと思います。工業団地の中に土地があるのだから、そこへ誘致するとか。しかし誘致するにも道路が整備や上水道が整備されてないのです。井戸水を全部吸い上げているわけです。だから、本当にどう考えればいいのかというところが一番大事なことじゃないかと思うのです。そういうのがあれば、即、行動できるのではないかと考えます。

[会長]

将来像のところで、ここの中に何を入れるべきかということで、国際性とか女性とかというのがありました。

[委員]

基本的に我々は豊かな財政が必要だと思います。財政を豊かにするために何をするか。工業団地の有効活用などその辺をもっと入れるべきではないかと思います。その上で教育だとか商工業などが成り立つてくるのではと思います。

[会長]

「ときめき」という言葉はいいでしょうか。

[委員]

「ときめき」というのなら、ときめくのですよ。

[委員]

市民の目線で「これって何？」となった途端に、私はあまり採用すべきではないと思います。「ときめき」と言ったら10人が10人白井市の人たちが「ああ、そうだね」と言ってくれないと、ここはキャッチフレーズ的なものにならないと思えます。だから「ときめき」と言ったときには、本当に10人みんな「そうだね、この白井市は」と言ってくれるかというのはすごく不安です。

[会長]

「みどりあふれる」はどうですか。

[委員]

「みどりあふれる」は結構みんな気持ちは一致していると思います。

[委員]

私は関谷委員が言われるように「環境」という言葉を「みどり」の中に具体的に入れたほうが良いと思います。

[委員]

3ページの「3 まちづくりの基本的視点」のところで、「若者定住」とありますが、若者がここで仕事をしたり子育てしたりというところが高齢者などにつながっていかないといけませんし、そこは大事なのではないかと思います。

[会長]

キャッチフレーズとしては、「みどりあふれる快活都市」でもいいという感じはあるのでしょうか。けども。

[委員]

「快活都市」はどうですかね。みんな慣れている言葉でしょうか。

[会長]

「快活」のコンセプトは、示されていますが。

[委員]

示しているのですが、これを目で追って「ああ、なるほど快活都市を目指す」というふうに皆さんなってもらえるかなとすごく思います。若者に白井市に定住、住んでみたいとか、ここにいたいと思ってもらわないといけないと思います。そうしないと住民税も確保できません。ただ、悲しいかな、今、都心回帰なのです。都心のほうが刺激もあるし、家賃もそこそこ安く、昔ほど格差がないということです。やはり、今の若者はちょっとした仕事をしたいのだと思います。アルバイトでもいいし、何かすぐ身近に仕事がある。白井市というのは、そのニーズを満たしていくというのは、かなりのことをしないと難しいのではと思います。だから、あまりそこは無理せず、「若い層」に住んでいただきたいのです。都心へのお勤めでもいいので、この白井市に住んでいたいという人を発掘していければ良いのではと思います。

[委員]

ただ、そこで出てくるのが北総線の運賃問題です。北総線というのは個人の企業です。企業とどういう話し合いができるのかということ、非常に難しいと思います。

[委員]

公共事業ですよ。鉄道は公共事業。

[委員]

公共事業というけれども、国がやっているとか県がやっているとか、そういう企業ではないので、運賃であるとか、それはもう直らないと思うのです。

[会長]

重要な問題ではありますが、今はこの議論は・・・。

[委員]

ただ、一例として、東京湾のアクアラインも当初普通の料金で、なかなか木更津が発展できなくて、いろんなことを考えて、あれだけの発展あり、我々には考えられないようなことが起きているわけです。何かそういうことを、この白井市で考えられないかという感じがします。

[委員]

例えば、まちづくりの基本的視点や戦略に緑とか農業とかあるので、そこで東京から児童生徒を呼んで体験農業をする。そうしたら、これは北総線を使って来るわけです。それを何回かやってそこで宿泊施設をつくるとか、そしたら観光も含めて何か事業になるのではないかと思います。

[会長]

時間の関係もありますので、まとめたいと思います。将来像のところでは「快活都市」というキャッチフレーズをつけたわけですが、「みどりがあふれる」は問題ないので、「快活都市」とい

うのは、要するに人と人とがふれ合うとか、あるいは快適に暮らせるとかという意味で、これを使っているわけですね。そうすると、そういうまちにしていきたいということは当然だろうというふうに、それは異論のないところだというふうに思うのですが、あとは「ときめき」という部分ですね。

[事務局]

この「ときめき」と「快活」という言葉ですけども、こちらは先ほど山岸委員の意見がありましたように、市民がすぐ聞いてわかるということも大切なことではあると思います。このスローガンを見ていただいたときに、「ときめき」という言葉はなかなかこういうスローガンには使われない。そして「快活」という言葉は辞書にありますけど聞きなれないということがあります。その一方で、市で少し考えたことは、これは将来像であり、キャッチコピーではないのですが、これから若い人を白井市に呼んでこようという施策を打ち出す中で、「これはどういう市なのだろう」など、興味を持っていただけるという視点も少し含んで、今回の案となったものです。

[会長]

「ときめき」というのは、若い人たちがここへ来てときめかないと定住してくれないということがありますので、その意味を込めて、そういう表現を使ったということですね。

[委員]

「ときめき」といったときに、「ときめくこと」は各個人で相当違うと思うのです。そういうイメージでトータルとして、事務局が言われたようなことにつながるのかなと思います。そういう意味ではかなり難しいのではないかと思います。

[委員]

「ときめき」というのは、言葉として使うよりも、各年齢層を誘導できるというふうな考え方のほうがいいのではないかと。

[事務局]

何か良い言葉ありますか。

[委員]

言葉はないのだけれども。

[委員]

関谷委員の意見には「ひびきあい」という言葉がありますが・・・。

[会長]

でも「ひびきあい」も「ときめき」もあまり変わらないような感じはします。

[委員]

私は「ときめき」は良いと思いますが。何か光が見えるなというような感じで。

[会長]

「ときめき」については、ちょっとした説明を加えればいいかもしれませんね。どうですか、よろしいですか。はい。ということで、その辺のところは整理してもらおうということでよろしいですね。

[事務局]

イメージができるような説明書きが必要だということですね。あと、交流とか環境、女性の活躍などの視点のご意見も入れられるように考えてほしいということの受けとめでよろしいでしょうか。

[会長]

それで結構です。
あと、副題の検討も含めてということで。

[会長]

次のまちづくりの基本的視点の5つについてご意見をいただければと思います。

[委員]

「農・みどり」の視点で、ここで農業はある意味で直接的な言葉で、みどりというのは抽象的な感覚の言葉であるということで、この辺が引っかかるのですが、「みどり」の中に関谷委員が言われるような「環境保全」ということを考慮されたらというふうに考えています。

[委員]

「若者・定住」の視点で、「若者」というのは、決して未成年とか二十歳前後とかということだけではなく、もう少し幅広いと思います。皆さんどうでしょうか。もう少し幅広に捉えて、子育て世代も含めて考えていると思うのですが。

[委員]

私が思っているのは小学生、中学生、高校生が卒業してもこの地域に残る、地域で就職して働いて、なおかつ地域で活動ができる人という部分と、もう既に働いている人が、この白井に来てくれるというところとは全く違うわけです。「若者」はもう少し上の世代だろうと。

[会長]

ここへ来てくれるという・・・。

[委員]

来てくれるという、ここに定住してくれる、農業に参加しようが工業団地に参加しようが、ここへ来てくれると考えたほうがいいのではと思います。

[会長]

そうすると、「若者」という言葉でいいかどうか。

[委員]

「若者」というと幾つぐらいの感覚ですか。

[委員]

25、6から30歳ぐらいでしょうが、今、イメージされているのは40歳ぐらいまでですね。

[委員]

40歳ぐらいまでだと思います。

[会長]

そうすると「若者」という表現はかなり限定されるので、「若い世代」という言葉はどうでしょう。

[委員]

そうですね。「若い世代」ですね。

[委員]

幅が広がりますね。

[会長]

幅が広がるので「若い世代」のほうがいいという感じでしょう。

[会長]

それから次の「農・みどり」はどうですか。何か「農」といったら古くさいような感じはしますが。

[委員]

「農」は第一次生産の「農」ではなく、これからは生産・加工・販売まで含めて「農」というふう
に考えないといけないと思います。それで地産地消ができるということも含めて。

[委員]

この前、テレビで、大町の梨園のことをやっていました。あれを見て、他の市は上手だなと思いました。1次産業的な「農」という言葉では何か1次産業に閉じ込められるようなイメージしか
出てこないのでは。だったら、もうそこで働くのが嫌だと、3Kだか5Kだかわかりませんが、
そんなところはもう嫌だというふうなことに結びつきかねません。

[委員]

私が農家の人と話をしても、農家はそれでいいと言うのです。これでいいと思っているのは農家
個々の家だけ。後継ぎはいるかというといないのです。だから何とかしないとけないというの
は、我々が感じていることだけかなと思ったり、ちょっと不思議な感覚なのです。

[会長]

何かいい言葉ないですかね、「農」に対する。農協もJAという言葉ですからね。

[会長]

それでは「にぎわい・交流」「拠点・移動」「風景・憩い」はどうでしょうか。よろしいですか。

[委員]

「風景・憩い」は「みどり」ということを想定するのですよね。「農・みどり」の「みどり」は
直接言葉に環境という、あるいはそれに類する言葉にかえたほうがいいのではと思っています。

[会長]

「農」は何にかえますか。

[委員]

農業と環境を一緒につける必要があるのかどうかと。白井の特徴は農業ということですので、農
業の育成ということで、竹内委員言われたように、総合システムの農業であってほしいのですが。

[会長]

農業の「農」を「みどり」にかえたらどうでしょう。

[委員]

(そうすると「農」を) 発想しないと思います。多分。

[会長]

そうですね。

[委員]

私は工業と農業をドッキングさせたもの。

[委員]

商工業、農工業。

[委員]

要するに工業から出た熱を農業に持って行って、そこで大規模な生産拠点をつくるなど。

[会長]

農工業というのも何かちょっと古いかなと感じます。

[委員]

そういう古い言葉ではもうだめなのです。今の言葉で。

[委員]

アグリビジネスや6次産業活用。

[委員]

そうですね。私はそのほうが。

[委員]

もう一つつけ加えるならば、クライנגアルテンというのがありまして、住宅に住んでいる方々が小さな畑を借りて、そこで自分たちが食べるだけのものをつくるというものもあります。

[委員]

それはもうその人なりにやってもらえばいいわけです。

[委員]

それはそれで、ここに住みたいということの大きな魅力になるのです。

その「農」というのは実は広い、いろんな広がりがあります。少なくとも農業だけで白井市全体が賄えるというようにはいかないのではと思いますが・・・。

[委員]

私はそうするために考えたいのですが。

[会長]

ではもう「農」でいいのではないですか。

[委員]

解説の文の中で広がっていくほうが良いですね。

[委員]

そのほうが良いかもしれません。

[会長]

それでは、「若者・定住」の「若者」を「若い世代」にかえる意見で。事務局のほうはイメージとしてはどうですか。まだ決めるというのではなく検討を。

[事務局]

検討させていただきます。

[委員]

遠藤委員が言われた白井では農業はと言うけれども、ではオランダの農業はどのようなのですか。あんなに小さい国で世界第2位の輸出国です。アメリカに続いて。だからいろいろ考えようにはあるというふうにいきましょうよ。

[会長]

それで、要するにキーワードを「農」という言葉にするかということが問題。「みどり」はいいと思うのですよ。

[事務局]

「農・みどり」の視点の横に、そのキーワードの説明の文章がありますが、そのバランス、工夫が必要だと受けとめております。辻川委員の意見で「みどり」は抽象的で「農」はどちらかというといふ具体的ということがありますが、市で検討しているときに最初は「みどり」は「自然」という言葉でした。しかし、「自然」というと山、川、海を想像するというので、白井市は自然というよりも「みどり」のほうが良いということになったものです。そういう経緯もあります。もし、「農」という表現の代わりになる「農」をイメージできる言葉を何かあれば、ご教授願えればと思います。

[会長]

ここの「みどり」は良いのです。下に「風景」という視点もありますので。しかし「農」という言葉が良くないのではという意見が・・・。

[委員]

いや、好きになればいいわけで・・・ですから、1次産業としての「農」ではないというふうにしていただければ。

[会長]

では、説明する文章の中で。そのほうがその方が良いですね。

[委員]

まちづくりの基本的視点の4つ目の「拠点・移動」ですが、今、白井市が関谷さんと一緒に小学校区のまちづくりをやろうとしているわけですが、そういったものがここへ入らないかなと思います。基本的には小学校区ごとに物事を考えているというぐらゐの言葉を入れてほしいと思います。

[会長]

ここは理念的なことなので、この程度に抑えておいて、ご意見の部分は具体的なところで。

[委員]

はい。

[委員]

まちづくりの基本的視点の5つの「説明」を読みますと、「農・みどり」と「風景・憩い」、これは同じものです。また、「にぎわい・交流」と「拠点・移動」も同じです。こんなに細分化しなくてはいけないものかと思います。（統合した方が次の「戦略1～3」と整合する。）

[委員]

「移動」は大丈夫でしょうか。移動しやすい環境として確保できそうでしょうか。それこそ鉄道の料金の値下げなど目論んで・・・。

[委員]

そうではなくて、「移動」は図面に出てくる道路とか、それを考えているのではないかと思います。だから、幹線道路の道路面が広がっています。工業団地の道路が広がって大型トレーラーが回れるなど。

[会長]

いや、それも含むけれども、バリアフリーとかそういうことを言っているのだと思います。拠点、場所ですから。動きやすいという意味でしょう。

[事務局]

説明の文章がすごく少ないというのはありますが、5つの視点の言葉は幅を持たせたものになっているというのはあります。想像がしやすい、いろんな想像をされているということは良いと思います。

[会長]

それはそうだと思いますけど、竹内委員からありました工業団地への道路を何とかしろとかという話になってしまいませんか。

[事務局]

「7 将来都市構造」の図では、計画道路としているという図柄にはなっています。

[委員]

「農」と「みどり」のことなのですが、「農」と「みどり」は別物に分けて、ここは「農業」という言葉だけにして、「みどり」のほうは下のほうで「風景」とか「憩い」ということで環境という関連で一括りにしたほうが良いかなと思います。農業については竹内委員からも意見で総合農業とありましたが、やはりフードマイレージという農業の地産地消と、食の地産地消という言葉をここで何かもつとうたえることができないかなと思いました。「みどり」については、ただ単に生物多様性だけをここでうたうのではなく、やはり一般の住環境も含めて、例えばエネルギー問題を含めて何とか解説でうたえるようなことにならないかなと思います。

[委員]

「農・みどり」という書き方は、私は非常に良いと考えています。この白井市がもし農業、特に梨園が潰れるとみどりが喪失してしまうのですね。農業が確保できないから荒廃して、荒廃したその地主さんはどうするかといたら、資産として何かのお金にしなくてはいけないので、うってしまいます。それらは結局、住宅地か何かに利用されていってみどりが失われてしまいます。ですから、白井市にとってはものすごく大事な資源であり、農業を守るというのはすごく大事な基点だと思っているのです。ですから、密接に結びつけるという形で、私はこの書き方がすごく好きなのです。

[会長]

ということですが、ほかに意見はありますか。いろいろ意見があり、これをもっと簡素化してはどうかという意見もありましたが、ただ、せっかくこういう対にしてキーワードにしているわけですから、これらの5つの視点は残して、そして説明の部分で補う文章にするということでしょうか。

(「異議なし」の声あり)

[会長]

次のまちづくりの重点戦略で、戦略1・2・3についていかがでしょうか。

[委員]

住民意識調査で「移住したい理由」がありました。それに対するものがこの中のどこのプロジェクトに入ってくるように考えているのでしょうか。移住したい理由をなくさないで、白井市からみんな去って行ってしまいます。財政も厳しくなるし、白井市としての存続にかかわってくるので、それこそ何か戦略を練って、位置づけをしないといけないと思います。その辺の戦略がもしこの中に入っているということであれば安心なのですが、その辺はどうでしょうか。

[事務局]

例えば、今後古い団地など、若者が住めるような団地の再生とですとか、あとは子育て世代の環境づくりという面では子供がもちろん住みやすいというものもあるのですが、例えば親が子育てしながら生活していく中で子供を預けて、自己実現のために何かに通っているとか、そういった子供も安心して預けられる環境プラス、親も生活を楽しめるそういった環境づくり、若者の住まいの確保プラス、子育て世代の環境づくりというもの。そしてあとは今現在住んでいる子供、親が気になる教育なども重要になってくると思います。

[委員]

それぐらいで「住んでみたい」とか「住んでいたい」というふうになるのかなという感じがします。もっと強烈というかもっと個性的に出さないと。前回の審議会でも賃貸住宅がだんだん空き家として増えているような話がありました。一番そこが肝心なところなのですよ。もう都心のほうが便利で安いからそちらへ住んだほうがいいやと出ていってしまう。賃貸に住んでいる人というのは身軽ですから。もうその次の都心に行きたい予備軍がいるのです。それを引きとめないと、白井市は成り立っていかないわけです。(移住したい理由として) 鉄道の交通費も割高で通勤通学に不便である。市の発展に期待できない。こう言っているわけですから、本当に何か位置づけしないと白井市の将来は見えないと思います。

[会長]

そうなので、ここは若者が住みたくなるプロジェクトになっているわけです。そうするとその中身を子育てが楽しめるとか、単身の若者世代、ファミリー層中心とした若年層の定住促進ということではちょっと弱いと思うということですか。

[委員]

小学校1年生をおじいちゃん、おばあちゃんが放課後に預かる「放課後子供クラブ」という大口で開発したプロジェクトがあります。半年以上過ぎてから募集しましたので、月に今のところ2回ですけれど、10人も来ればいいかなと思っていたのですが、30人集まったのです。ということは、自分は仕事をしたいし、ほかのことをやりたいし、その間におじいちゃん、おばあちゃんが預かってしつけをやってくれるとか、そういう意識がすごくあるということです。そういう意識がすごいと思い、これをもう少し増やして行かないといけないと思いました。結局、そういう具体的なところで一つ一つ組み立てていくということであると思います。

[会長]

そうすると、安心して子供を育てられるまち。そういうのは必要ですね。

[委員]

先ほど事務局からありました定住の戦略について、実質と取り違えをしているのかなというのがある、コミュニティとか空いた時間に勉強とか、そういう話があったのですが、実際お母さんたちは、そういう時間がない方がほとんどだと思われま。現役の子育て世代、ほとんどの方がパート等に出ていかれる方が多いと受けとめています。ということは白井市の中でそういう世代を呼びとめるには、やはり就職先、働く場所の提供が必要ではないかと思えます。もちろん、それに伴って子供を受け入れる環境等も必要です。

あと若い世代の呼び込みということですが、そちらのほうも、やはり山岸委員の意見のように、条件が良ければほかのところへどんどん流出していくのが現状だと思います。実際、私の友達も男女とも独身はやはり30代、40代かなり多いのですが、そういった方たちを見ると、将来のことを考えて一戸建てを買うことはまずないです。ほとんどの方がマンションで、しかも中古・新築にこだわられません。中古物件でなるべく住宅費を安くして、自分の生活の豊かさに給料をつぎ込んでいるという部分が多いと思うので、そういう点では新しい地区の開発等ではなく、先ほどあった、マンションの空き部屋のリフォーム等をして、安く住環境を提供できる体制を整えて、若い人たち呼び込むという努力も必要なのかなと思います。

[事務局]

例えば「子育てを楽しめる」という表現は、平川委員、どうでしょうか？

[委員]

もちろんそれも必要だと思います。確かにこちらに引っ越してきて白井の近郊で働くことが考えにくい状況だと思うのです。そうすると白井を拠点にして、外に働きに出ていってしまう。ただし、土・日休みのときに白井市の中で遊ぶ場所があれば、それほど出かけなくてすんでいく。白井で遊ぶ場所がないと、平日市外で働いて、なおかつ土・日休みもどこかに行ってしまう。だったら、そのどこかの近いところに住んだほうが楽だよということになってしまうわけですね。ニュータウンの開発区域の中では印西市のように大きな商業スペースが難しい状況にはなっていると思うので、そういった部分では働くのは市外に行っても、土・日の過ごし方をなるべく白井の中で気持ちよく過ごしていけるような、そういうサービスとか場所の提供、あとプランの提供等を市とか公共または地域の中で考えていく必要があるのではと思います。

[会長]

だから、楽しめる環境ということは、やはり重要なのだということです。先ほどありましたように、安心して子育てができる環境も重要。

[委員]

「若者定住」の「若者」は先ほどの基本的視点で意見があったとおり、「若い世代」というように幅を持たせるわけですね。

[会長]

そうです。

[委員]

ということで、単身の若者世代やファミリー層など多様な人材ということですね。戦略1「若者定住プロジェクト」の文章の中で、「単身の若者世代や～」以下は頭に持って行って、「快適な生活空間の創出～など」というのを後ろに持っていくと、「など」いう中に先ほど指摘があったいろいろ膨らんだ施策が入ってくると思います。ここでずらずら書くわけにはいかないのです。

[会長]

では、戦略1はその文章の文言を整理していただくということです。

[会長]

次に、「戦略2 みどり活用プロジェクト」はどうでしょうか。また「農」があり、ここは地産地消の仕組みとかがあります。

[委員]

基本的にはこれで良いと思います。

[委員]

私は「健康」という言葉を入れてほしいのです。みどり活用プロジェクトのところで、川岸を遊歩道にして、親子や高齢者が散歩できるとか、そういうことができるのではと思うのです。国土交通省は木を植えるなどということですが、木は自然に生える分には良いのだと思いますが。ただ自然に生えないから難しいのですけれども。

[委員]

このプロジェクトの先のことになってしまいますと思うのですが、「みどり」として農地の保全等をうたっているのですが、これは市が関与する方向にしていくということなんでしょうか。農地は個人の所有物ですが、それをどのように進めていくかはこれから先のことなので、ここでは触れなくて良いのでしょうか。

[事務局]

例えば、遊休農地などを集めて、農業をできる人にやっていただくなど、市が関与することによって両方が安心することがあるのではと思います。

[委員]

農地バンクの機構として市が関与していこうかという・・・。

[事務局]

そういうこともあります。あとは「健康」の視点という意見もありましたが、やはり体を動かすことによって健康になる。そして、自分が食べるものを自分で作るというところの部分もあるのかなと思います。

[委員]

そうすると遊休農地を市が一旦借り上げて・・・。

[事務局]

そこは、市なのか、NPO等がやるかというのは別問題なのですが、そういうイメージはありません。先ほど山岸委員から意見あったように、放っておいたら資材置き場等になってしまうということもありますので、そこはこのプロジェクトで力を入れるという意味でこの戦略になっています。

[委員]

今話のあった資材置き場云々は、今年の4月に市の条例で、そうならないようにしましたよね。

[事務局]

それは条例としてあります。だけれども、農地を保全するということは貴重な「みどり」でもあるということで捉えております。そこをどう活用できるかというのは、産・民いろいろ活用できるのかなという意味合いで説明の文章になっています。

[委員]

現状として農地の転用について、資材置き場を介せば宅地に変えていける法律になってしまっているので、その部分について少し詰めが甘いのかなと思ってしまいます。その資材置き場云々ということに関しては、一回資材置き場にして、資材置き場で使ったという実績を残した上で、その会社が倒産なり、そういう形式を踏めば宅地に変えられるのです。

[委員]

「みどり活用プロジェクト」のところに、憩いだけでなく、それこそ体験できる場、都心ではできない、若い人たちにも経験になる体験できる場ということも中に入らないでしょうか。

[会長]

まちのみどりを活かしたまちづくりをするので、それも含まれているという理解でよろしいのではないのでしょうか。

[会長]

次の「拠点創造プロジェクト」はどうでしょうか。

[委員]

これで良いと思いますが、コンパクトシティの意味合いの関係で、将来を見渡しますと、多分、どの自治体でも公共公営施設の再編という時代を迎えると思います。白井市はまだ新しいので、もっと先の話かもしれません、例えば小学校の統廃合があり、それをどう活かしていくのか。そのときにどうしても商業施設は、印西の千葉ニュータウン中央みたいなポテンシャル、力が無い。そうすると、公共公営施設の再編と商業施設を合わせてやっていくことが必要だと思います。例えば成功例を申し上げますと、佐賀県の武雄市の武雄図書館。ツタヤが指定管理で、本も売っている。5万人のまちで、年間150万人集客しているらしいです。話を聞いてみたのですが、子供連れて行って、図書館の中で騒いでもいいらしいのです。大体お母さんたちは、子供がうるさいから、それを一番気にされているようです。使い方に色々な工夫して騒いでも良い場所と完全に静かな場所を区切ってつくっているのです。公と民と合わせて連携してという時代がもうどこにも来ていますので、そういう意味では、この拠点創造プロジェクトは単に「官」だけでは、なかなか拠点にならないという感じがあります。

それともう一つ、移動しやすい環境とか交通弱者でも移動しやすい環境づくり。ここでは鉄道の

運賃のことはなかなか書き込めないで、そう読まなくていいのですが、でもこういうところに、言葉を残しておくことで、例えば将来、北総線に対して値下げなど色々なことにつながるのではと思います。とにかくこのまちはそこさえクリアされれば、相当色々好転するまちなので、これはもう布石にでもなんでも使う、これに残していく必要はあると思います。例えば、ドイツのまちなのですが、「リージョンカルテ」という、地域チケットというようなことで施策的にやっているのですが、土・日に子供、家族の電車運賃が無料なのです。とにかく家族単位で動く場合、電車を使って動ける。これは、自治体が補填しているのだと思いますが。それでみんな電車を使うようになり、これが環境に優しいまちとなります。つまり鉄道会社側だけに押しつけておいても、なかなか運賃は下がらないので、色々な工夫が必要ということですね。それが日本で今できるわけではありませんが、少しでも実現すると、このまち変わります。そこが一番のネックになっているのです。

[会長]

それでは「拠点創造プロジェクト」について文章部分は検討として、こういう形で。

[会長]

次の4ページはこれまでの内容の図表になりますので、これまでの意見で変わる文言を入れかえるということで対応をお願いしたいと思います。

[会長]

それでは5ページの「5 まちづくりの進めかた」です。ここはいかがでしょうか。

[委員]

「(1) 情報・共有」は情報の公開が行政として非常に重要だと思いますので、これを入れていただきたいです。あと「(3) 持続可能な行財政運営」で「事業の選択と集中による効果的な財源配分」というのは、非常に言葉的にはきれいなものになっているのですが、効果的な財源の配分というのは、いろいろに捉えられるので、適切な用語ないかなと思います。高齢者に対しては手当てなどあると思いますが、効果的と捉える人もいますし、非効率的でないかという捉え方もされる可能性もあるので、この辺はどうかというのは、私はクエスションです。

[会長]

(1) 情報の共有のところ、情報公開ですね。いかがでしょうか。

[委員]

情報共有ということで、行政と市民との双方向の情報の流れということなのですが、現在も実施しているタウンミーティングなど、先ほども意見がありましたとおり、子育て世代等の若い人の参加が少ないというのが現状だと思います。原因の一つというか、私の周りもそうなのですが、市や行政等に対して興味がないという意識が随分強いです。学校の運営等もそうなのですが、決められた中に身を投げるというか、自分たちで何とか変えようとか、こういう気持ちが薄いのかなというのがあります。この「双方向」を目指すのであれば、子育て世代はやはり子供と一緒に参加できる情報交換の機会を目指すべきだと思います。具体的には、学校の授業とか学校のイベント等に子供が行政、まちに関心を持つという教育プログラムを取り込んでいって、子供から「お母さん、ねえ、行ってみようよ」とか「今度こんなのがあるみたいね」というような話がもし出れば、親もついていくというのが一番流れるには簡単なのではと思っています。

[会長]

ほかにありますか。市民と行政がまちの情報を共有するということ。これは例えば災害時情報なども、それも含めてですかね。

[事務局]

オープンデータ化とか、あとITを使うという意味合いもここに入っています。そうすると若い人が取り込みやすいという。

[会長]

それと、山岸委員から意見あった「選択と集中による効果的財源の配分」についての言葉はどうでしょうか。

[委員]

基本的に私は良いと思います。情報の共有については、例えばNPOなりがやろうとすると、費用がかかるので、ある意味では半身に構えている方が多いのですよ。それは個人経費がかかるからということなので、この辺をいかにするか。

[会長]

ほかにありますか。よろしいですか。将来像の実現に向けたまちづくりの進め方、3つのポイントですよ。これでよろしいですか。

(「異議なし」の声あり)

では、これはこのとおりにさせていただきます。

[会長]

それでは、6ページ「6 将来人口(1) 将来人口の見通し」はデータですので、ほかに、もっと入れてはということがあれば。これについては事実なわけですから、問題ないかと思いますが。

[委員]

これは会長おっしゃったとおり事実なのですが、65歳以上を高齢者とする定義を、市がもう少し高齢者をうまく活用して、5歳でも10歳でも延ばしていくような、国の区分とは別な区分を設けるような施策をやっていけば、高齢者問題というのは、もっと緩和されると思います。かなり難しいと思うのですが。そういう姿勢がこれから必要ではないかと思います。高齢者は金がかかり、社会問題だと言うだけでは物事が進まないです。

[会長]

それと、65歳はまだ若いですからね。70歳でも元気なわけですから、それを高齢者というふうに一括りにしていかどうかという議論がありますよね。このデータとしてはこのとおりとさせていただくということで、よろしいでしょうか。

(「はい」と呼ぶ者あり)

[会長]

次の7ページ。「(2) 目標人口」ですが、重点戦略を着実に推進することによって、この人数にしていくのだということですが、いかがですか。

[委員]

目標の数値は良いと思います。これに対する具体性がいろいろ少しずつ書いてありますが、もう少し何とか市民がわかるような設定ができたならなど。これでもわかると思うのですが。

[委員]

やはり、施策の問題で、どういう施策をとるかということだと思います。だから、農業も工業も全て今までと違ったことをしていかないと。人に頼らず、もう白井市で何とかするというふうにしなないと、だめですよ。

[会長]

それでは、目標人口は目標として設定ということで、もう少し具体的な施策というか、説明に追記を検討してください。

[会長]

8ページ「7 将来都市構造」については、山岸委員から（昔ながらの「街道」を大切になど）意見は最初のほうでありましたが、他にご意見ありませんでしょうか。

[事務局]

（昔、魚を運んでいた）生街道などそういう視点も都市マスタープランの中とか、今後の施策等を考える時に文化財というところの視点や資源という視点で考えられるのかなとは思っています。この構造図はすごく集約した図であるので、構想だということでご理解いただければと思っております。

「委員」

白井市の歴史を踏まえてきたものは、そこを残しておきたいというのが私の気持ちです。

[会長]

それが白井市の特徴にもなっているという。

「委員」

そうですね。白井市というイメージの構成の一つだと思うのです。

「委員」

行ったことがあります、「鮮魚街道」といってもセールスポイントになるようなものが何もありません。ただ、昔の道。これでは何か打ち出そうとしても無理なのでは。部分的にごくわずか残っているかもしれませんが、大部分は車の道。例えば、木曾福島や奈良井宿のようなイメージではないです。だから、何かこれから打ち出そうとしてもそんな楽な話じゃないような気がします。無くさない努力は良いと思いますが、ただ、相手があることです。個人が嫌だと言え、それまでです。

「委員」

（印西市の）東京電機大学の裏に昔100個ぐらい並んでいた庚申塚があるのですが、日本で2カ所しかないのです。その1カ所がそこなのです。私は白井だけではなくて全体を考えて、そういうめぐっていくということが大事なことですし、今言われたところの文化も僕は地域に残っていると思います。印西市には1300年の獅子舞が残っているのですよ。そこは68世帯しかないのです。そういうところでも1300年の獅子舞が残っている。そういうのが白井の中でもっとももっとあると思います。だからもう少し掘り下げていったらいいのではないかと思います。それをつなげていくことですよ、全て。財産を持っているのに、使わないでそのままなくしてしまっている。それを掘り起こすということも大事なことです。

「委員」

そういうものは貴重ですし、是非保存しなくてはいけないと思います。私のイメージにあったのは、白井市と柏市の境界（藤ヶ谷）の自衛隊に向かうところにある神社です。ぼろぼろで、「おいおいこんなことにしておいていいのかな」と。昔の人が残した財産があればではもったいないです。

「委員」

逆にそういうことをアメリカ人のケビン・ショートが印西市や白井市で活動して、持っている財産をいっぱい引き出してくれています。こういうことを継承していくのが私は良いと思います。

「委員」

歴史再開発みたいなのがあってしかるべきです。例えば、清戸に宗像神社がありますけども、ああいうものも位置づけをきっちりして、アピールして、色々なものに結びつけていくということも必要なのではないかと思います。

「委員」

宗像神社は5つあるのです。全部が塞がっているのですよ。私もケビンといろいろ歩きましたけど、そういうこともやっぱり一つですよ。だから、いろいろほかの力も借りてやりましょうよ。

「会長」

それからもう一つ、里山の保存ですよ。そういうこともやっぱり大事ですよ。ほかにありますか。

「委員」

将来都市構造ということで、これは良いと思うのですが、交通のことで、何か交通というとならすぐ北総線の運賃の話に向くのですが、いわゆるコミュニティバスみたいなのは皆さん利用してないのですか。あれは無用の長物……。

「委員」

ナッシー号のことですね。利用しています。

「委員」

私も利用しています。

「委員」

結構便利にされているのですか？

「委員」

便利じゃないです。間隔にむらがあり、必要なときに来ないです。

「委員」

費用とのバランスもあるし……。

「委員」

北総線に乗るのはお金がもったいないから、あのバスを利用するというのが実態です。

「委員」

私はどちらかという则在来なのですけども、多分きょうの会議の中で土着民といわれるような人間は私ぐらいだと思います。皆さんニュータウンの方で新しく白井に来たりして、いろんな意味で白井を良くしようとして言ってくくださる方で。竹内委員が農家の人に聞いたら、「これでいいんだよ」と言っていたとのことですが、まさにそれで、私も要するに今で満足してしまっているというか。大体意見が出るというのは不足とか不満とかあったときに意見が出るのですけれども、聞いていてそんなに不足もない、そんな中でやっぱり意見も出づらいのですけど……。
ただ、コミュニティバスに関しては、私自身は利用していないのですが、とにかく近くのいわゆ

る高齢者、交通弱者がスムーズに行かれるような交通、駅前に拠点をつくるのも良いのですが、なぜか北総鉄道の運賃の話になってしまう。いわゆる市内の移動の話でコミュニティバスのことでもう少し何かいい案がないのかなと。

[委員]

私は有効活用させていただいています。良いですよ。
時間間隔は長いですが、やはりそれを知って利用すれば、十分利用できます。

[委員]

私も全然知らないで言っているの、あんまり根拠ないのですが・・・。

[委員]

経費とのバランスで、どの辺を増やせるかというような問題がありますけど。あれはなくすべきではないです。

[委員]

ということはさっきの意見（ドイツの事例）にもあった、日曜日に家族全員無料だとか。そういう何かニワトリか卵か話になってしまいますけれど、まずは利用させるのが先みたいな感じで、徹底して利用するほうに先に着眼点を置いて、損して得取れじゃないですが、そんなようなことも考えてもらえたら、もう少し利用する、利用してくれれば、結局台数も増えるのだろうし。何かいい案がないのかなと思いました。

[会長]

将来都市構造の中でコミュニティバスの活用とか、そういうことももし含められたら、文章の中につけ加えるとありがたいということですね。

[委員]

循環バスはぐるっと回っても150円、私は、障がい者の方の付き添いで乗るので、あんなにぐるっと回っても1回50円。しかし一番困るのは、時間の間隔が長いということ。施設をよく利用するので運転手も顔なじみですし、楽なので循環バスナッシー号を使いたいのです。本数が少なく不便ですが、少数意見部分がなかなか反映できないので、改善されない。とにかく本数をふやしてほしいというのが障がい者のニーズです。

[会長]

交通問題というのは、要するに北総線の運賃問題だけではないということですね。

[事務局]

都市計画課が担当している都市マスタープランについて、この将来都市構造図との関係等を説明します。この案にある将来都市構造図は総合計画に載るものなので、大枠になります。そのため都市マスタープランのほうでは、拠点に関することや、土地利用方針図の方でさらに具体的なものは示していくこととなります。先ほど交通についての意見がありました。広域的な交通として、当然鉄道は大事なのですが、コンパクトシティの考えもありますので、拠点間をコミュニティバス等で結んでいくというのが考えの一つにあると思っています。また、拠点は駅前だけではなく、例えば産業の拠点としての工業団地、農業の拠点として、例えば先ほど平川委員の意見がありました市民農園的な取り組みが農業の拠点になるかもしれない。そういった拠点をなるべくつなげていくという考えは都市マスタープランでも示していこうと思っています。どうしても総合計画のこの構造図ですと、大枠となって、その辺が見えないというご意見だと思いますので、お話をさせていただきました。

[会長]

「コンパクトに何とか」というより、コンパクトシティを目指すということを具体的に文言にしたほうが良いのではないですか？

[委員]

コンパクトというかなり構造的な話ですから、市民にコンパクトシティと言ったって何もわかりません。都市マスタープランの方で示した方が良いです。

[事務局]

施設の統廃合によって、駅前などの中心に人口を緩やかに誘導していくコンパクトシティの考えもありますけれども、そうではなくて地域の拠点、例えば小学校区に拠点をつくって、それを地域交通のほうで結ぶことで、小学校区の人口をある程度維持するような形のコンパクトシティも考えられると思っています。遠藤委員から意見がありましたけど、例えばそういったところにクラインガルテンのような農園付の住宅を認めるような形があったとしたら、人口を少し外から引っ張ってくるなど、具体的なことは、また都市マスタープランなどで考えていきたいのですが、どうしても総合計画ですので総論の話になってしまうということです。

[会長]

ということで、将来都市構造については、この案の形でまとめさせていただきます。これを実現するための具体的な方策というのは、今後の都市マスタープランなどの計画になろうかと思いません。

[委員]

少し気になるのが、この将来都市構造図で、千葉ニュータウン中央駅の桜台地区の西隣が駅から結構近いのに、他の駅圏と違って市街地ゾーンになっていないのですが、どうして市街地ゾーンにならないのかなど。市街地ゾーンとしては無理としても、緑住ゾーンにはなり得るところではないかと思うのですが、どうしてでしょうか？

[事務局]

(桜台地区は)市街化ゾーンで黄色は塗っていますが・・・。

[委員]

例えば、西白井地区は、こんなところまでと思うぐらい駅から遠くまで市街地ゾーンになっています。黄色の市街地ゾーンでなくとも、黄緑色の緑住ゾーンぐらいには・・・。
濃いグリーン(緑農ゾーン)の一部を黄緑色(緑住ゾーン)にするような考え方はないのでしょうか？

[事務局]

黄色の部分は、既存の市街化区域を示しております。デフォルメしているののでわかりにくいと思いますが、桜台地区の道路から少し出っ張っているところまでが市街化区域なので、黄色の市街化区域という形です。濃い緑の緑農ゾーンとして沢山の泉などがあり、守っていくべきゾーンです。かなりデフォルメしているのので、イメージとしては国道16号から北側のほうについては、緑農ゾーンでみどりと農地を守り、活かしていくところ。その南側、鎌ヶ谷・船橋寄りにつきまちは、緑住ゾーンとして考えていく、そういう色づけになっています。もう少し詳しいゾーンングについては、都市マスタープランの土地利用方針図で示していこうと考えています。

[委員]

これは将来都市構造ですよ。何故、先ほど言った桜台地区の西隣を緑住ゾーンにしていこうという考え方が出てこないのかなど。もう、こんなところに住む人がいないと考えているなら、それでも良いのですが、濃い緑色（緑農ゾーン）一色に塗るということではなく、もっと選択肢があるような気がするのです。

[事務局]

市街化区域の縁辺部については、少し（住を含む）色をとということですか？。

[委員]

駅からの距離は当然ネックになります。でも、この図面で見ると、白井、富士、西白井の各地区と駅からの距離を比較したら、桜台地区のもう少し西側に緑住ゾーンが設定可能ではないのかなということを申し上げているのです。

[委員]

実際、私、十余一在住ですぐ近くなのですが、これは市ではそういう計画自体がないということです。十余一近辺の宅地開発が、条例の関係もあり昨年度で終わっているのですが、それに対して、住宅というのは上下水道の整備というのもあるので、市のほうに私も問い合わせたのですが、市水の関係で、市水は国道16号までしか通らない。十余一・平塚・神々廻地区等については、市水を通す計画自体がずっと前からないという話なのです。何故ないかという、そのお金を使うよりも県水がせつかくニュータウンまで来ているので、その県水を引っ張ったほうが市は早いと考えて、計画を立てないという話です。要するにライフラインが整わない限りは、幾ら緑住ゾーンにしても、開発自体が条例等を変えていっても、なかなか難しくなってくるのかなというのがあると思います。国とか県とかの問題になってくると思うので、その辺の縦割りの行政自体を取っ払えば、広く緑住ゾーンとして、市も考えていくのかなと、個人的には思っています。

[事務局]

あくまでも、（濃い緑色の緑農ゾーンは）市街化調整区域なので、都市計画税等もご負担していただいていませんし貧弱な都市整備基盤になっています。スプロールしてしまったところは確かにありますが、そこは何かの形で整序はしていかなければいけないと思いますし、その時はご負担の話も多分セットになってくるのではないかとも思います。また、人口減少となり、空き家などの既存のストックをどう活用するかというのも重要ですので、新規に宅地開発を誘導する土地利用を認めていくような時代ではないのかなとは思っています。ただ、先ほど申しましたとおり、地区を維持するための有効な住宅とか、魅力ある住宅とかというのは、施策として考えて、都市的土地利用を認める部分はあっても良いでは、ということは考えています。

[会長]

ということだそうです。

[委員]

はい、わかりました。

[会長]

それでは、議論はこれで終了します。

議題 2 その他について

[事務局]

◎今後のスケジュール等について

- ・本日、審議いただいた素案については、意見のあった主に各項目の説明の文言について、検討して、文言を整理させていただきたい。これを修正して、12月15日以降、「広報しろい」等で市民の皆さんにパブリックコメントを実施する予定。このパブリックコメントでの意見を踏まえ、最終的に市で基本構想（案）を策定する。次回の審議会でもパブリックコメントの対応方針と基本構想案に対する答申内容について、審議内容としたい。
- ・第4回 日時 平成27年2月5日（木）午後2時～4時
場所 保健福祉センター（ウェルぷらっと）2階 研修室2
（内容予定）
 - ・パブリックコメント対応方針について
 - ・基本構想（案）答申内容の検討

【質問・意見等】

[委員]

これまでの審議会の議事録について、第1回と第2回の議事録がもらったままになっていますが、議長からこの場で、配布された議事録で良いか確認をとったほうがよいのではないかと思います。

[会長]

それでは、議事録は第1回と第2回について送られてきたと思いますが、よろしいですか。問題ありませんか。
（「結構です」と呼ぶ者あり）

閉 会

[会長]

意見が出尽くしたものと思われまます。本日の議題は全て終了いたしました。これをもちまして、平成26年度第3回総合計画審議会を閉会いたします。どうもありがとうございました。

●会議終了